

文学・語学

全国大学国語国文学会 編

第 223 号

『源氏物語』葵巻卷末の和歌表現

—「春は来ぬる」の引歌を中心に— 古田 正幸 (1)

読書から翻訳へ、読者の自由と翻訳者の葛藤

—『万葉集』の二首の歌の例を通して—
ジュリー・ブロック (24)

「平成28年 国語国文学界の動向」 (25)

上代散文：伊藤 剣	上代韻文：大谷 歩
中古散文：太田敦子	中古韻文：惠阪友紀子
中世散文：小助川元太	中世韻文：阿尾あすか
近世散文・演劇：三浦一朗	近世韻文・国学：服部温子
近現代散文：山田夏樹	近現代韻文：野本 聡
国語学古典語：小田 勝	国語学現代語：阿部二郎

〈近代文学小特集〉 近世文学における汽水域の発展

延宝・天和期俳諧と白居易諷諭詩

—妖狐趣味をめぐって— 安保 博史 (80)

手紙の道。遙かなり。地方俳壇と物流網が

織りなす書簡ネットワーク 森田 雅也 (97)

芭蕉の俳文における汽水域

—和と漢の注釈を通して— 塚越 義幸 (110)

『俳諧水滸伝』から広がる俳諧ネットワーク

早川 由美 (121)

平成三十年全国大学国語国文学会賞の選考経緯並びに授賞業績の紹介

同賞選考委員会委員長 石原 千秋 (131)

学会賞受賞のことば

池原 陽斉 (133)

平成二十九年度文学・語学賞の決定のお知らせ

(135)

会報

(136)

手紙の道。遙かなり。

——地方俳壇と物流網が織りなす書簡ネットワーク——

森田雅也

〈キーワード〉近世の書簡 地方俳壇 蕉門以前 物流網 舟運

一、古典文学と手紙コレスポネンス

今日の日常生活において、インターネットやそれを利用したSNSの類いは衣食住以上に欠かせないツールとなつてきていることは今さら言うまでも無い。しかし、元来インターネットが軍事衛星を用いたネットワークを利用したものであることは存外知られていない。軍事に使う通信手段がいつの間にか大きな変化を遂げていったのである。なるほど三十年ほど前までの情報交換は手紙、電話が主流で携帯電話は珍しかった。半世紀前までは電話が自宅にない家庭も多かった。十九世紀末から二十世紀を支えた緊急連絡の必須手段は電信による電報であったが、今も活用されているのであろうか。

ここで老いの繰り言を述べようというのではない。我々、古典文

学研究者が、当時の同時代人同士の文化交流について、何某と何某とは知己の間柄であったとか、親交を深めていたとか、見てきたかのような文化ネットワークを提示し、作品を通しての影響関係、受容関係の裏付けとするのは常套手段であるが、そこに往還書簡でも発見し提示すれば厳然たる事実となる。特に近世俳人の研究には欠かせない調査手続きである。

それでは古来、その書簡による交信とはどのように行われたのであろうか。

有名な『伊勢物語』「東下り」の段に以下のようなくだりがある。
ゆきゆきて駿河の国にいたりぬ。宇津の山にいたりて、わが入らむとする道はいと暗う細きに、蕨かへでは茂り、もの心細く、すずろなるめを見ることと思ふに、修行者あひたり。「かかる

道は、いかでかいまする」といふを見れば、見し人なりけり。京に、その人の御もとにとて、文かきてつく。

今まで、この場面はけもの道で会っただけで、いくら「見し人」でも形振り構わず恋文を託す「昔男」の色事へのまめごとぶりと解釈していたが、最近はお観点を變えて、当時の書簡送信方法の一つを示すものとして興味を持ち始めている。就中、いくら修行者であっても、何の対価もなしに京への直通便を託されたのであろうかという疑問は払拭できない。仮にこの修行者が配達行為に何らかの対価を得ていたなら、当時の地方と都を往来する旅人は図らずも小遣い稼ぎとして、書簡配達請負人的役割も果たしていたのではなかろうかと仮想する。結局、この場面こそ書簡ネットワークの原初形態として注目するのである。

これもまた有名な『枕草子』「さまざまじきもの」の段に

人の国よりおこせたる文の物なき。京のをもさこそ思ふらめ。されど、それはゆかしき事どもをも書きあつめ、世にある事などもを聞けばいとよし。

とある。やはり、今まで「物なき」にこだわる貪欲な清少納言よと冷笑し共感していた場面であるが、今読めば、後半部は地方からの書簡に拠つてもたらされる非日常的情報を心待ちにし、貴重なものとして扱っていたインテリ都人の心情として読むことが出来る。

『枕草子』には他にも「文」を書いた箇所が多く興味を惹く。

常に文おこする人の、「何かは。言ふにもかひなし。今は」と言ひて、またの日音もせねば、さすがに、明けたてば、さし出

づる文の見えぬこそさうざうしけれと思ひて、「さても、きは、きはしかりける心かな」と言ひて暮しつ。

この苛立ちながらも只管、頻繁な書簡往還相手からの「文」を待ち続ける姿に、今日の我々の「Eメール」の返信に振り回される他愛ない姿を思い合わせてしまう。つまり、昔も今日同様、通信ネットワークの存在は日常生活必須のアイテムとなっていたのである。ただ、その「文」の往還手段は今日のようなシステムを介させない、書き手から使い番に託されて直接配達される単純な方法であったと言えよう。代表的なものに恋文があるが、それは時を超えて長く馴染んだ手紙の往還手段であったのである。

これとは別に古代では遠距離の公的文書の往還には駅馬、駅伝制度があった。もちろん、戦場においては早馬で一刻も早く急変を告げる伝令が用いられたが、武士の書簡往還の場合は機密性のためにも、戦時郵便に近い使い番による直接配達が行われていた筈である。それでは再び、中古中世における庶民の書簡往還方法はいかに行われていたのであろうか。

そこには手紙の往還方法を考える前に、消息文の往還ができる人々という限定が必要であろう。つまりは識字の問題である。

識字率の低い昔時において文字情報が必要なものは教養の高いインテリ層であったことも思いなせる。ビジネス用の書簡を除けば、生業以外の雅趣の愉しみとして書簡の往還を行うわけであるから、彼らは比較的日常の生活に余裕のある富裕層であったと見なせよう。さすがは伝達人の労苦に報いる十分な対価も用意され、そのシステ

ムの下でこそ書簡の往還は可能であったと考えられるべきであろう。戦時には、しばしば命がけの忠誠心の賜物のような書簡伝達の例が残るが、それはあくまで公的軍事通信の類いに入る。それなりとも後日に書簡伝達人に戦死の可能性と等価交換の報酬がなくてはシステムが崩壊したであろう。もともと管見では中世期における隠者などの私的風交に関する書簡の往還システムに言及した資料は極めて少ない。

織豊政権期を経て泰平の徳川政権となった近世期は三百諸藩の分権国家ともいえるが、天下一統が果たされた日本国の時代と言える。ローマ帝国に限らず歴史上の多くの国々が統一国家造りの礎としたインフラ整備が十七世紀初頭から始まった。特に江戸幕府開闢と同時に宿駅制度が整備された五街道は江戸幕府直轄管理となり、その付属街道も次々と整備直轄化された。大名家に課せられた参勤交代の必要上でもあったが、安全面でも道中奉行が置かれ、陸上交通網は確保され、人とモノとの交流が盛んとなった。

その陸上交通網を利用したものが飛脚制度であった。

「飛脚」とは「速く走る者、手紙を運ぶ者のことをいう」とは『国史大辞典』が定義するところであるが、古代の駅制の頃から見える語である。それが近世期の「飛脚」となると「継飛脚」「大名飛脚」「町飛脚」に大別できる。「継飛脚」とは幕府公用の飛脚であり、宿場から宿場へと継ぎ送る。「大名飛脚」とは大名が国許と江戸屋敷との間の連絡のためにもうけたもので紀伊や尾張などの大藩のものが有名である。これは七里飛脚とも呼んだが、七里ごとに飛

脚小屋をもうけて継がせたことによる。「町飛脚」とは民間の飛脚である。寛文三（一六六三）年に江戸、京都、大坂の三都の商人が幕府の許可を得て飛脚問屋を開業した。毎月三度出立する「三度飛脚」は定期便であるが、大坂と江戸を六日で結ぶ「定六便」は臨時速達便であった。この飛脚制度は厳正に運営され、明治四年に郵便が開始されるまで続いた書簡往還の正式なツールであった。

ところで、近世の識字率は徳川幕府の教化政策もあつたために、非常に高くなつた。当然ながら、その当時のデータは残っていないが、士農工商の身分の差なく、藩校、寺子屋、商家の丁稚教育などによって、書簡に必要な最低限の読み書きは遍く行き渡つていたと考えるべきであろう。もともと、曲亭馬琴の嫁や野口英世の母の逸話などにみるように庶民の女子教育まで対象を広げると難しい回答となるので別儀としたい。その条件付きで近世期の人々を見れば、少なくとも情報を必要とする生業につくものは、それなりの文字教養があり、身分による違いに関係なく、文字による私的情報収集は日常生活を送る上で欠くことのできないものとなつていた。その点、手軽で信頼性の高い「飛脚制度」による書簡往還システムは重宝であつたであろう。また、この制度の下では現金の今という現金書留のような機能も有しており、近松門左衛門『冥途の飛脚』にみるように飛脚問屋を介して安全に送金はなされていた。その意味では飛脚制度は近世期における日常的なコレスポンデンスとして多くの人々、多くの用途で利用されていたと言えよう。

しかし、その料金は高価なものであつた。例えば、先の「定六便」

より早い四日便などは江戸から大坂の片道間で四両二分(約四十五万円)であった。³⁾「三度飛脚」の場合は「六十文(約千五百円)」と安いが片道は早くて十四日、大雨で川止めでもあれば日数は増える上に、「定六便」が高価ながら宛所まで配達するのに比して、飛脚間屋止めになるため、さらに時間を要してしまう。いずれにせよ、今日の郵便料金とは比べものにならないほど高価なものであり、特別な情報をもたらす非日常的手段でもあった。

さて、ようやく本題ながら、それならば、当時の数多く残る俳諧の添削や発句や歳旦帳などの師弟間、俳友との往還書簡は、果たして、この飛脚便を用いていたのかと言うのが、本論考の眼目である。もちろん、古来から残る直接伝達方法は別儀とする。

俳諧の世界は芭蕉のような一部の芸術家を除けば、あくまで余技で有り且那芸である。地方俳壇の場合は特に言える。風雅の遊興に陶然となるのは自由であるが、単なる贅沢な道楽とされてもしまかない。遊興に金銭的物入りは常である。そうなること儉約を旨とする時代に、いかな素封家でも金銭の多寡に拠らず、たかが文雅の趣味の私的書簡往還に飛脚便のような公的システムまで用いるのは憚られたはずである。それでは外のどのような方法で手紙を送付していたのであろうかという疑問を素朴に持つ。その近世期の俳諧書簡ネットワークの形成について、以下、検証を行いたい。

二、近世後期の地方俳壇における書簡往来

平成九年、熊本県玉名市迫間某旧家から、文化四年(文政三年に

わたり全国の俳人たちと交信した手紙が、襖の下張より百八十三枚も発見されたことを報告している。⁴⁾これは近世後期に交通の要衝地玉名に美濃派道統や高弟によって「連」と呼ばれる俳壇が形成され、独自の俳諧活動が活況を呈していたことによる。これほどの全国の俳人との書簡往来が地方の旧家から発見されるということは、当時の地方俳壇の人々がいかに盛んに書簡によるコレスボンデンスを愉しんでいたかがわかる好例と言えよう。

義仲寺史蹟保存会が出版した『寛政期諸国俳人書簡集』⁵⁾という刊行物がある。この書簡書は十八世紀後半に宮崎日向城ヶ崎住の俳人太田可笛宛に全国の俳人から寄せられた書簡の集録である。城ヶ崎俳壇の発端は、行脚俳人安楽坊春波が、城ヶ崎の豪商である小村西雪(後に日高姓)らを指導し、元文三(一七三八)年に「俳諧秘伝書」を与えたのがはじまりとされ、その後、京都から来た百井塘雨の指導を受けるなどして、太田可笛、小村五明などの俳人を輩出した。特筆すべきはこの可笛が蝶夢(一七三二〜九五)に感化され、その門として傑出した俳人となったことであろう。蝶夢とは全国を行脚し、芭蕉復興の活動に生涯を捧げた俳人として有名であるが、可笛もまた俳諧理念や作風面の弟子だけでなく、蝶夢の活動そのものを支えた支援者の一人であったのである。蝶夢は義仲寺(大津市)で営む芭蕉忌を中軸とした芭蕉顕彰運動を全国的規模に展開し、芭蕉堂を再建したのみならず、組織力にすぐれ、諸事業を通じて諸国俳人の蕉風化を進めたが、可笛はその一翼として宮崎日向俳諧文化圏から活動に参加したと言えるであろう。

可笛の住んだ城ヶ崎は、日向国那珂郡のうち、大淀川下流右岸に位置する。江戸期は飢肥藩領となり、隣接する赤江港から上方の堺港と薩摩の坊津港を結ぶ航路の中継港であったので、千石船が出入し、当地は物資の集散地、商人の町として栄えた。「赤江城ヶ崎や撞木の町よ、鐘（金）がなければ通られぬ」と詠まれたことから間屋街・色町のにぎわいぶりを知ることができる。また町独自に銀札を発行するほど高い経済力を持ち、城ヶ崎俳壇の名で多くの著名な俳人を生むなど、独自の町人文化を形成した⁸⁾。この上方と結ぶ集散地、大淀川河口の赤江湊を中継期に開いたのが、太田七郎左衛門であった。太田家は爾来、この地の豪商として行政面でも君臨し、その豊かな交易力と経済力を持って日向城ヶ崎俳壇のリーダーとなつたのである。田中道雄氏は、右の書の「解説」において、

また、一地方俳人である可笛は、中央俳人への師事を通じて、次第に諸国俳人との交流を重ねて行つた。その実態を証するものが、各地俳友から寄せられた、所収の他の三卷（度雄書簡一卷・其両書簡二卷）の書簡集である。（中略）度雄は日向の彼方土佐宿毛の住、其両は同じ九州で筑前の笹栗の住、ところがその二人の手紙は、一度上方を経由し、内海の通商ルートに乗って可笛に届けられるらしい。ここで「蝶夢菴か又橘ヤ」と記すのが注意される。諸国俳人相互の文通に、中央の俳人蝶夢とその協力書肆橘屋治兵衛は、媒介者として大きな役割をになうのである⁹⁾。

と分析されているが、まさに地方俳壇と中央俳壇の通信方法に流通

網が関わっていたとされる実証例といえよう。しかも媒介者の一人が、当時の俳書刊行書肆の泰斗とも言える、京都橘屋治兵衛であったのである。「蝶夢菴」の庵主蝶夢が地方俳壇の組織化に努め、蕉風浸透に貢献したことは先述した。蝶夢が地方俳壇の有力リーダーと中央俳壇を強力に結びつけたことはその書簡往来の広範さでわかる。そこには日常として、流通網を利用した書簡往還システムがあつたのである。

その蝶夢は安永八（一七七九）年二月二十一日から四十余日、雲州紀行に旅立っている。その全文は、蝶夢二十五回忌に彼を追福するために行した門人越智古聲が文政二（一八一九）年に刊行した『はまちどり』に載せて上梓したことで知られることとなる。『奥の細道』を思わせる「雲州紀行」では京、桂川、久世、山崎、水無瀬川、桜井、西宮、若屋、笠岡、府中、庄原を経て、備後から出雲へと入っていく¹⁰⁾。出雲の地は戦国期の尼子一族の連歌好きから始まり、元禄期になって大淀三千風の出雲への来訪、元禄期の神官で談林俳壇の「日置風水（生没年不明）」の登場などによって俳諧に馴染んでいた。文化・文政期には松江藩七代当主松平治郷（不昧・一七五一〜一八一八）の実弟衍親が、俳人「松平雪川」として知られるなど出雲での俳諧愛好の気運は高かった。元来、同時期の多くの地方俳壇同様に俳諧の名士には美濃派俳諧の門人が多い地であつたので、蝶夢への憧憬も高かつたであろう。各地で歓待を受けている。

「雲州紀行」によれば蝶夢の旅の目的は出雲大社への旅とするが、

それだけではあるまい。芭蕉の『奥の細道』の旅の目的にもその傾向があったように日向俳壇の場合と同様の出雲俳壇との邂逅が目論まれていたはずである。「雲州紀行」からは出雲大社に大なり小なり関わる人々が多いのは文事である以上当然であろう。

ところで、古くから雲州には蝶夢の住む京・上方へと続く物流網の道が存在した。いわゆる「たたら出雲鉄の道」である。鉄鉱石の産出量が少ない日本において出雲で算出される上質の和鉄は安楽港から北前船を用いて西廻り航路の各港に運ばれて賑わいを見せていた。この流通網が日本海側と京都を結んで文化交流にも貢献していたことは、右の松平不昧公他、影響例に枚挙の暇が無い。加えて石見銀山の「銀の道」も存在した。重い鉱物にもかかわらず、石見銀山の森から瀬戸内海へと抜ける運搬道は陸路であった。備前に抜けるルートもあり、蝶夢の「雲州紀行」で立ち寄った場所とも重なりを見せる。つまり、出雲俳壇との手紙の往還にはこの「鉄の道」と「銀の道」が用いられた可能性が強い。

近代国家日本では鉱物資源が乏しいことが悩みであったが、江戸時代の日本では金、銀、銅、鉛など多く採掘され、中でも銀は再三にわたって外国への輸出が制限されたほどであった。近世期の日本における鉱物物流網は、関係業者によって陸路・海路とも十分な整備がなされていた。一方で『西鶴諸国ばなし』巻四の五の堺の話に登場する「朱座」のような場合は幕府管理下におかれ、朱仲買による公的監視下に置かれた流通網があった。同様に金、銀など多くの鉱物物流網は幕府監視下にあったが俳諧に関する書簡往還システム

として滑腕に寄与していたことは容易に想像できる。

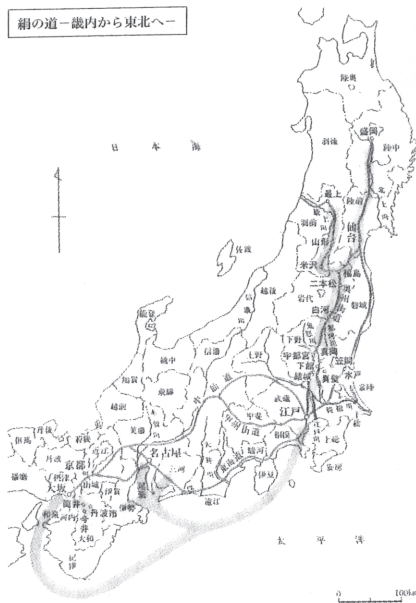
再び、雲州俳壇の人々についてであるが、芸州の俳壇とも結びついていた。下河内和人氏は、この点について、芸州の可部地方の文化発展の理由を物流の流れから分析され、

可部は出雲街道・石見街道の分岐点に位置し、山陽と山陰を結ぶ重要な交通の要衝の地として栄えた。また、太田川・三篠川に挟まれたところに位置し、水運による物資輸送にもかかわってきた。したがって可部の文化を考える場合、出雲・石見街道と太田川水系に注目する必要がある。物資輸送・人の往来と共に、また文化も往来したのである。¹¹⁾

と述べられた上で可部俳壇が水運・街道の主要拠点を経済的に牛耳っている人々によって支えられていたことを宝永三年から天保三年までに刊行された俳書の編著者との一致から論じられている。さらにそれ故、交通の要衝地を掌握する可部俳壇の人々が広島俳壇と雲州俳壇を結びつけ、俳諧の交流を密にしていたとされている。本稿の主旨からは意義深い調査結果といえる。

地方俳壇と全国を結びつけた手紙運用システムは右の「川運の道」「陸運の道」と同様に、「綿の道」も考えられる。蝶夢の書簡にも多く残る会津喜多方の豪商関本家は古くから会津北方俳壇を主導し、文化年間の関本巨石、如髮親子に全盛期を迎え、福島地方に限らず、実に多くの全国との俳人と書簡による交流をもっていたことが判明している。¹²⁾ 会津喜多方地域では近世期に入った元和七（一六二二）年に「木綿売中間」が結ばれ、早くから商人たちによって綿の流通

網が東北各地へと整備されていた。この実態は会津に限らず、当時すでに全国に「綿の道」とも言うべき流通路が成立していたことが知られている。歴々の豪商関本家の場合、生業は多岐にわたっていたが「綿の道」を用いて全国の俳人仲間との書簡往還ネットワークを形成していたのである。



「綿の道」(林玲子氏ご著書(14)より)

「綿の道」があれば「綿の道」がある。群馬県富岡市にある富永家が代々俳諧グループの拠点であったことは報告されているが、絹売人から絹売宿、絹買宿・出店そして越後屋、白木屋、松坂屋、大丸屋などの都市呉服問屋に流れる流通網は俳諧の手紙往還には格好の手紙ルートであった。この「綿の道」は全国にも多く、その例を見出せる。同様に「麻の道」も想定できるが未だ研究途次である。

「塩の道」も地方俳壇の手紙運用システムとして活用した流通網として考えられる。富岡儀八氏は、

塩は生活必需品であるため、如何なる山間僻地へも万難を排して移送された。したがって、経済路の開発的な役割を果たしたといっても過言ではない。また、多くの場合、往荷ないし復荷として米・大豆・薪炭・茶・魚類などの一般物資と共に移送されたため、一般経済道の指標とすることも可能である。¹⁷⁾

つまり、江戸時代は生活必需品の搬送路として開発された「塩の道」が人々の交流道路として利用されていたわけで、これもまた俳諧書簡往還システムに組み入れるには格好の流通路であるが、このシステムを利用した地方俳壇を明確に観取するに至っていない。

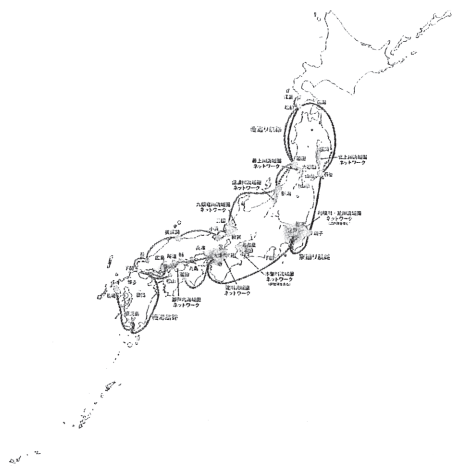
あるいは全国的な商品経済の発展に伴う民間の金融流通ネットワークそのものが書簡往還システムに関係していたのかも知れない。例えば元禄期に勃興した三井家のネットワークだけでも目を見張るものがあつた。実際、三井秋風、志太野波(三井越後屋番頭)、池田利牛(同手代)、小泉孤屋(同手代)のようにネットワークの中にあつた俳人もいた。住友、鴻池等に限らず、店主以下俳人に名を連ねる例をあげるとは軽易である、小林一茶は好例であろう。

流通網の開発は公的に行われたものは少ない。山海を問わず生きる人々の生命線として幾日もかけて私的に拡がったものである。特に姫街道のような抜け道は百年を要したのである。それ故、庶民が利用する正当性があつた。結果、近世後期において地方と都市で、あるいは地方と地方で俳諧の添削などの安価な文通方法として全国

に展開する流通網が日常的なツールとして定着したことは間違いない。それでは、そのような流通網が整備される過渡期にあった近世前期はいかがであったろうか、以下、考察したい。

三、近世前期の地方俳壇における書簡往来

先に近世前期に幕府によって陸上交通主要道路のインフラが整備されたことは述べた。同時に海上交通においても米経済中心の幕府経済にとって上方廻米、江戸廻米の安全な流通システムが必要となり河村瑞賢によって、西廻り航路、東廻り航路海運網が整備され、付随する内陸部よりの河川舟運も整備され、十七世紀中頃には日本



近世前期「海の道」(森田作成)

全体を結ぶ舟運流通網がほぼ完成していた。近世前期は「海の道」が高速道路であり、「川の道」が幹線道路となったのである。もちろん、それらは「舟の道」であり「潮の道」だったのである。俳人たちが余技の俳諧の私的書簡往来ツールとして、この全国に張り巡らされた身近な舟運流通網を利用しようと発想したのは自然の成り行きと言えよう。

近世前期の俳諧流派は、十七世紀は貞門派↓談林派↓蕉門派と展開し、十八世紀から地方は美濃派などに分派しながらも蕉風俳諧一色となり、明治期の正岡子規を待つことになった。しかし、個々の俳人については、特に松尾芭蕉(一六四四〜九四)が蕉風俳諧を確立する以前の俳人の場合、右の三派の何れに属し、どの時期にどのように支え、何時、離脱していったかということを明示化できる俳人は数少ないであろう。国学などの学統と違い、俳歴はわかっても俳諧流派は難しい。例えば、談林派の始祖西山宗因(一六〇五〜八二)は松永貞徳の貞門派からの独立であるし、その弟子で大坂談林派の雄、井原西鶴(一六四二〜九三)の俳歴は定かでないものの貞門派から若くで立机したと考えられているし、芭蕉も主君蟬吟とともに貞門派に学びながらも、桃青時代には江戸に来訪した西山宗因と一座し、談林派と目された。それが地方俳壇の人々の俳歴となるとますます明白に流派を区分しづらい。そこで一例を示す試金石として、蕉門確立以前に貞門派、談林派の俳人と一座、あるいは交遊した人々の活躍期(延宝〜元禄前半期・一六七三〜一六九三頃)に物流網を利用して三都の俳人または書肆と書簡往来を行っていた

可能性が高いグループを以下に列記した。調査途次のため疎漏は多いが、論者が実地調査を行った地域のみとした。なお、大名俳人や大垣藩士など武士階級は物流網を利用した可能性もあるが、独自の往還システムもあったとして除外した。順不同である。

1. 河内俳壇の活躍…三田浄久を中心とした大和川川運グループ。
2. 豊中俳壇の活躍…水田西吟を中心とした豊中富農層グループ。
3. 須賀川俳壇の活躍…相楽等躬を中心とした流通・富商グループ。
4. 尾花沢俳壇の活躍…鈴木清風を中心とした紅花流通・富商グループ。
5. 大石田俳壇の活躍…高野一栄を中心とした最上川舟運グループ。
6. 象潟俳壇の活躍…庄屋、廻船問屋を中心とした流通・富商グループ。
7. 大垣俳壇の活躍…谷木因を中心とした舟運グループ。
8. 鳴海俳壇の活躍…下里知足を中心とした醸造業関係グループ。
9. 福井俳壇の活躍…三国湊の豪商を中心とした廻船流通・富商グループ。
10. 敦賀俳壇の活躍…天屋玄流を中心とした廻船流通・富商グループ。
11. 日田俳壇の活躍…中村西国を中心とした流通・富商グループ。
12. 八代俳壇の活躍…米商人を中心とした球磨川川運グループ。
13. 大津・膳所俳壇…琵琶湖を中心とした湖運グループ。
14. 大和郡山俳壇の活躍…前句付などにみる富農層グループ。
15. 伊丹俳壇の活躍…上島鬼貫ら伊丹風を形成した酒造グループ。

16. 堺俳壇の活躍…南元順（方由）を中心とした町衆グループ。

他にも幽閑らの南部俳壇や堺俳壇と親しい長崎俳壇、前述の肥後玉名、備前、備後、安芸俳壇、阿波俳壇なども物流網の発展と関係があると考えられるが調査中である。

1. 「浄久」の俳壇は全国への河内木綿商いの流通を担う大和川川運の仲間が中心であった。2. 「西吟」は西鶴と親しく、「好色一代男」の跋文などでも知られているが大坂近郊農業として物流網を持つ富農と俳壇を形成していた。3. 須賀川俳壇の祖「等躬」は須賀川宿駅の駅長を務め、『奥の細道』では芭蕉を一週間も泊めているが、街道の要衝、川運の要衝須賀川は流通網の拠点で富裕層が多く文化水準も高かった。4. 尾花沢の紅花大尽「鈴木島田屋八右衛門道祐」こと「清風」が京坂・江戸を往復して俳人としての修業と名声を得たことは有名であるが、その編んだ俳書には尾花沢の人々よりも多くの全国の俳人が入集している。それは清風の鈴木家が単なる紅花農家ではなく、広域な紅花を中心とした流通業の大問屋であったためである。まさに全国的紅花流通網の首魁であったのである。5. 「一栄」は大石田の船問屋。最上川川運グループの中心的人物であり清風と同じく談林派の俳人であった。しかし、『奥の細道』で「新古ふた道にふみまよふ」地とされ、芭蕉によって俳諧興行が行われた。大石田の俳諧は芭蕉来訪以前、以降も活況を呈しており、それは豊かな水量を誇る最上川の舟運、それを利用した流通網によって富裕層が多かったからである。6. 「象潟俳壇」の場合、『奥の細道』の芭蕉以前にも天和三年に大淀三千風、貞享元年に池

西言水が来訪しており、芭蕉を受け入れた今(金)野加兵衛、又左衛門のような庄屋・塩越湊を拠点とする廻船問屋などの富裕商家を中心とした俳壇があったと考えられるが詳細は不明である。7. 8. についてはともに森川昭氏による詳細な研究がある。本来、隣接する尾張俳壇に関して述べるべきであるが服部直子氏が

全体として貞門の主流に近づくべく俳諧に精進した人々があるものの、一方で俳諧史上談林俳諧全盛期の延宝年間においても、尾張俳壇といわゆる談林派との交流はごく少ない。²⁶⁾

と指摘されるように、論者の研究の基点が談林俳壇にあるため、調査が及んでいない。ただ、服部氏も「名古屋の連衆は碁盤割に居を構える人々を中心とした富裕な旦那衆の集まり」とされるように、岡田野水は呉服商備前屋、加藤重五は材木商、坪井杜国は有力な米商人であった。9. 福井俳壇の前に加賀俳壇に言及すべきであろうが、物流網となれば立花北枝よりも「一笑」に言及すべきであろうが、越中も含めて研究をすすめる必要がある。福井俳壇では「神戸洞哉」が『奥の細道』で「等哉」として登場するが福井城下の俳壇の中心とは思えない。²⁷⁾ 福井城下は北国街道と足羽川が交錯する陸と川の物流網の拠点であったが、廻船の出入りする港湾を持たなかったため、北方二〇kmのところにある九頭竜川河口の右岸の三国湊を外港として利用した。特に中世より続く豪商森田家、内田家、三国家など廻船問屋は西廻り航路物流網の一大拠点であった。そのため彼ら富裕層は俳諧でも名を馳せ、越前衆として北村季吟『新続大筑波集』、北村湖春『続山ノ井』、卜琴『越路草』などにも多数人集す

など活況を呈していた。²⁸⁾ 『奥の細道』では芭蕉が訪れた記述はないが、去来が後日来杖している。まさに俳諧と物流網の結合点であった。10. 敦賀は『奥の細道』に「氣比」「種の浜」として記されるが、芭蕉に歌枕「ますほの貝」を案内したのは廻船問屋「天屋何某」であった。「天屋何某」は天屋玄流こと室五郎右衛門。彼もまた敦賀、若狭海運流通業の首魁であるとともに敦賀俳壇のリーダーであった。その俳業は貞門とされるが、芭蕉来訪で蕉門となった形跡はないが以降も敦賀俳壇は隆盛している。11. 「中村西国」は西鶴の弟子であり談林俳人として『胴骨』を刊行するなど活躍するが、豊後日田の新興商人で富豪嶋屋久七の次男として生まれている。²⁹⁾ 日田俳壇なるものを形成したか不明であるが、日田は天領であったため、九州一繁盛し、大商人も多かった。交通路も川運によって九州東北から海路につながっており、彼もまた流通網を利用し、京坂・江戸へと進出し、大名貸を生業としていたためか、大名俳諧とも関係している。³⁰⁾ 八代は西鶴の『好色一代男』や『日本永代蔵』などに米商人として「八代衆」が登場するように西国米物流網の中心をなしていた。球磨川は川運に適した川ではなかったが、寛文二一六六二年から三年間を費やして、当地の町人林正盛が球磨川の開削工事を完成し、³¹⁾ 八代湾で川運と海運を繋ぎ、物流網の一大集積地となっていた。富裕層に俳人も多い。ただ、八代は談林派の祖「西山宗因」の故郷であるが宗因は早く京都に上り、地元俳壇形成にはあまり寄与していない。八代または人吉俳壇の生成研究を急ぎたい。13. 琵琶湖湖運物流網は近世以前から活況を呈していたが、西

廻り航路の開発で打撃を受けた。それでも、膳所、大津は物流網の拠点として賑わいを見せ、俳壇も形成されていた。早くから浜田酒堂のように芭蕉と親交を深めるものが多く蕉門に向けたが、芭蕉以前の俳壇形成については精査が必要である。14. このグループは前付を愉しんだ。当時、奈良・和歌山を中心に機智的な人事情を求める民衆文芸として前付付は好評を博したが、担い手は河内木綿で儲けていた富農層または川運に携わるもので綿糸物流網に関係する。ただ、宗匠としては当地出身の池西言水などを仰いでいた³⁹のであるが雑俳とされるため、実態の解明が遅れている。15. 鬼貫自身は武士階級でもあるが伊丹俳壇としては流通網ネットワークを持っていた³⁸。16. 堺俳壇は早く半井卜養を輩出したように隆盛を保ち続けた。その後、堺俳壇は南元順などが中心となったが、前川由平、和氣遠舟、小西来山、西鶴など大坂談林の人々にも近く、流通網ネットワークを利用するには最も便利な俳壇グループであつたらう。

地方俳壇と中央俳壇の邂逅は、芭蕉の『奥の細道』等では困難を極めたが、十八世紀以降、芭蕉の遺志を継いだ其角、嵐雪らの江戸座俳諧とは別に同じく蕉門の各務支考の弟子たちが地方行脚して獅子門こと美濃派を全国に上げた。いわゆる田舎蕉門である。美濃派の地方俳壇における影響力は大きく、芭蕉を祖として、支考、廬元坊、五竹坊を祖として地方俳壇と強い絆を結んでいく。一方で玉名俳壇のように地方俳人同士の往還書簡も無数に残っている。俳人名乗る人々に手紙往還システムは日常不可欠なものとなっていた。ただ、蕉門以前の近世前期の俳人たちの書簡往還は原初的である。

先に述べた近世後期の書簡ルートのような集散地が発見された例は未見である。三井、住友家などの豪商の活動もようやくネットワーク化し始めた頃である。おそらくはそれぞれの流通ルートを利用しながら、最後は「人情」による伝手によって俳人の机下まで運ばれたのであろう。何かにつけて顧客を大切にする商人魂は、むしろ高い信頼度を得ていたのではなからうか。商人としても手紙配達を通して日頃の鼻息に込める好機だったのである。人情とともに地方の情報もたらされる。大坂談林の雄、西鶴が十年ほどで二十作品近くの浮世草子を刊行したが、そのほとんどが諸国話の方法である。それらの膨大な素材とも言うべき「話の種」は人情による手紙ともにもたらされたというのが持論であるが未だ途次である。

四、おわりに

今号の特集は「近世文学の汽水域」である。本来、その意図を俳諧、散文、芸能などジャンルの越境域と捉えるべきかも知れない。その枠組みでは拙論の趣旨は近世期に発達した近世流通のネットワークと近世文学のネットワークの汽水域に見える人々の営みである。平成三十年度夏季大会のテーマは「『時代』に国語学・国文学は何をすべきか、大学では何ができるのか」であったが、近世期においては都市から遠く離れ、一見時代遅れと思われがちな田舎の文人たちこそ強かに先端技術の変化に対応し、逆にうまく利用して生き残ってきたのではないかという挑発的なテーゼである。

ただ、ここまで縷々述べてきた近世期の流通システムを利用した

安価な書簡ネットワークの定着は驚くに足りない。今日の我々の生活においても一時代前まで書簡の発送は郵政省による公的な郵便システムしかないと思ひ込んでいたが、いつの間にか民間の宅配配送網を使うというシステム選択肢が定着してしまっている。まさに執を一にしているのである。

もっとも本論文は現段階では俯瞰と言つてもよく、考証にも省略があり、具体例の中にも典型的な例示を逃していることは否定しない。また、いかなる且那芸の俳諧に関する書簡と言つても入集された俳書の出版や添削料など金銭を伴つた場合は、安全保障のある飛脚便を用いたであろう。その意味では為落の多い論証との誇りは謹んで受けたい。しかし、今回のようなテーマでなければ書けない「学と領域」という大きな問題に対峙しての一石であることはご諒解いただきたい。言旧るが隗より始めよ、である。

古来より文学に携わってきた人々が、その根底をなす人と人の血の通つた交信手段として大切にしてきた「書簡」往還システムから、文学を愛する人々のしたたかな営みが解明できないか。その研究の道程に文学研究者、文人の何らかの「時代を生き残る秘録が隠されているのではないかと自らに課して結びとしたい。

注

- (1) 『江戸東京学事典』「飛脚・郵便」(三省堂・一九八七年刊)による。
- (2) 『日本交通史辞典』「飛脚」(吉川弘文館・二〇〇三年刊)による。
- (3) 『江戸時代館』(小学館・二〇〇二年刊)による。
- (4) 『玉名市歴史博物館編』『玉名の俳諧』(玉名市歴史博物館・一九九七年刊)

による。

- (5) 大内初夫・田中道雄・石川八朗著『寛政期諸国俳人書簡集―太田可笛宛』(義仲寺史蹟保存会・一九七三年)による。
- (6) 蝶夢俳業の全貌は田中道雄・田坂英俊・中森康之編著『蝶夢全集』(和泉書院・二〇一三年刊)に詳しい。
- (7) 『世界大百科事典』(平凡社)項目「蝶夢」(担当 田中道雄氏)より。
- (8) 『角川日本地名大辞典』項目「城ヶ崎」及び松下志朗著『日向諸藩の事例研究 近世の山林と水運』(明石書店・二〇一一年刊)、前田博仁著『歩く 感じる江戸時代 飢肥街道』(鉾脈社・二〇〇七年刊)、永井哲雄著『改訂版 元禄期の日向飢肥藩』(鉾脈社・二〇一一年刊)による。
- (9) 注(5)に同じ。
- (10) 桑原規草著『出雲俳壇の人々』(だるま堂書店・一九八一年刊)による。
- (11) 広島文教女子大学地域文化研究所編『可部の歴史と文化』(一九九五年刊)による。
- (12) 喜多方市史編纂委員会編『喜多方市史』第十卷(各論編2)「第二編 文学 第四章第一節 近世の俳人と俳句 二 江戸後期の北方俳壇」(二〇〇三年刊)による。
- (13) 喜多方市史編纂委員会編『喜多方市史』第二卷(通史編2)「第一章 幕藩体制の成立 第六節 地方定期市の成立と展開 一 近世初期の商品流通」(一九九七年刊)による。
- (14) 林玲子編『日本の近世』5「1 遙かなり綿の道 綿の道の商人たち」(中央公論社・一九九二年刊)による。項目担当は林玲子氏。
- (15) 玉城司著『富永家の俳諧』(信毎書籍出版センター・二〇〇七年刊)参照。
- (16) 群馬県史編纂委員会編『群馬県史』5「第二章 蚕糸・織物業の発展 第二節 生絹・太織の生産と流通」(一九九一年刊)を参照した。
- (17) 富岡儀八著『塩道と高瀬舟―陰陽交通路の発達と都市の構造変化―』(古今書院・一九七三年刊)による。
- (18) 一般的には東海道の脇往還である本坂通ほんさかどの通称。しかし姫街道と称する道は各地にあり、いずれも本街道の脇道・裏道を指している。(『国史

- 大辞典」より)
- (19) 平林治徳編『三田浄久』(大阪女子大学国文学研究室・一九五四年刊)による。
- (20) 豊中市の市指定文化財「水田西吟探原田神社奉納俳諧額」に載せる勝句百句には近郊富農の名が多い。豊中の近郊農業と消費地大坂との関係については、脇田修著『近世の大坂の町と人』(人文書院・一九八六年刊)に詳しい。
- (21) 猪狩三郎著『おくのほそ道 福島県探勝記』(歴史春秋社・二〇〇三年刊)による。
- (22) 星川茂平治編著『尾花沢の俳人 鈴木清風』(尾花沢市地域文化振興会一九八六年刊)による。
- (23) 大石田町教育委員会編『大石田町立歴史民俗資料館史料集 第八集』(二〇〇三年刊)による。
- (24) 象潟町史編『象潟町史通史編下』(二〇〇一年刊)による。
- (25) 森川昭著『谷木因全集』(和泉書院・一九八二年刊)、同『下里知足の文事の研究 第一部(日記篇)』(和泉書院・二〇一三年刊)、同『下里知足の文事の研究 第二部 論文篇、第三部 年表編』(和泉書院・二〇一五年刊)
- (26) 服部直子著『尾張俳壇攷 近世前期俳諧史の一側面』(清文堂・二〇〇六年刊)
- (27) 拙稿『おくのほそ道』と地方談林俳諧 芭蕉が塗り替えた俳諧勢力圏―『人文論究』第六十三巻第四号・二〇一四年刊)では触れたが、俳諧文化圏という面から加賀国松任(現在白山市、北枝の故郷小松について調査中である。
- (28) 斎藤耕子編著『福井県俳人大観』(福井県俳句史研究会・一九九九年刊)による。
- (29) 印牧邦雄著『三国湊小史』(田中印刷堂・二〇〇九年刊)による。
- (30) 金沢学院大学文学部日本文学科編著『おくのほそ道 芭蕉が歩いた北陸』(北風新聞社・二〇一〇年刊)による。項目担当は山下久夫氏。

- (31) 大内初夫著『近世九州俳壇史の研究』(九州大学出版会・一九八三年刊)による。
- (32) 拙稿『西鶴「武道伝来記」と村岡騒動」〜地方談林俳人への「挨拶」の手法〜』(『日本文藝学』第五十一号・二〇一五年刊)に駒角との関係を論じている。
- (33) 『新版 角川日本地名大辞典』(CD-ROM版 二〇〇二年刊)「人吉市」の項目による。
- (34) 拙稿『言水評点前句付「誹諧愛宕土産」の翻刻注釈と研究』(『日本文藝研究』第六十七巻第二号・第六十八巻第一号又併号 二〇一六年刊)
- (35) 鈴木重雅著『俳人鬼貫の研究』(共立社・一九二六年刊)、『岡田利兵衛著作集』(第四巻 鬼貫の世界) (八木書店・一九九八年刊)による。
- ・本稿は日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究(C) 森田雅也代表「上方文壇と地方談林俳諧文化圏との繋属関係の研究」海川・物流網を視座として)「課題番号」K02480)期間:平成29〜33年度」としての助成、(基盤研究(C) 森田雅也代表「地方談林俳諧文化圏の発展と消長」西鶴の諸國話的方法との関係から)「課題番号」2420252)期間:平成24〜28年度」の研究成果による。
- (関西学院大学文学部教授)